

復活節 キリスト道講演会

## 永遠の生命を生きる(一) ——真の霊的生命——

2019年4月21日(京都KKRくに荘)

死から生命への復活 枯骨の復活(イゼキエル37章) いのちを墓からあがないだす(詩篇103篇) ナインの若者(ルカ7章) 会堂司ヤイロの娘(マルコ5章) ラザロの復活(ヨハネ11章) イエス自身の死と復活 イエスの復活と弟子の歓喜 弟子たちの宣教(使徒行伝3章) 「永遠の生命」の約束(ヨハネ3章) 私を食べ、私を飲め(ヨハネ6章) 人間の死後の状態(コリント第二の手紙4〜5章) 死人の復活(コリント第一の手紙15章) 我々の生き方 祈り

## ●死から生命への復活

皆さん、どうもよく来てくださいました。今日は、皆さまに私はレジメを作りました。わずか4頁のここに込められているものは、すごく豊かな内容なんです。この豊かな内容を味わったら、天に昇る気持ちにきつとなられることと思います。

「聖書は呻いている。まだまだ告白しきれなくて呻いている。それを聴かないとダメだ。聖書は読むのではなくて聴くのだ」

と。小池辰雄先生は言われました。

一応、私はレジメも用意しましたが、話の内容はレジメの何倍も豊かなものだと思いますので、このレジメを、皆さん、お帰りになってから、もう一度確かめていただく、そのために聖書の引用箇所を全部、丁寧に書いてあります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、その他手紙、その出典を全部書いてありますので、それを拠り所にしてまたもう一度それを確かめていただければ、ありがたいと思います。

そこで、レジメに沿ってお話を進めてまいります。

まず、今は春ですね。自然界は春になると、冬枯れの死の相から——冬は黒々とした木々ばかりで、あとは何も無い。そういう季節です。日本はまだ松という、緑葉樹というのがありますので、そんなに感じないけど、ドイツへ行ったら本当に黒々とした木々ばかりがあつて、どんよりとした空に覆われている。そういうのがドイツの、特にケルンなんかに居ました時にはそうでした。南の方はまだもう少し明るいそうですが——3月になりますと、雪の間からクロッカスが芽をふきだす。それで、「ああ、春がきた!」と感ずる。5月になると、本当に5月を待ちわびていたように、みんなが躍りだすような、そういう季節なんです。そんなことを思います。「レジメの引用箇所を《》で示す」

## 《I》序

自然界は春になると、冬枯れの「死」の相から、春の新しい生命の相へと変化する。正に「甦り」、死から生命への復活と呼ぶにふさわしい様相を呈する。そして、



春から初夏にかけて、自然界は生命の輝く季節を迎える。

人間界においては、どうであろうか？

肉体が死滅した後、復活（甦ること）があるのだろうか？

肉体は死の後、焼かれて土に帰るとしても、霊（靈魂）は生き続けるのか？

生き続けるとしても、それはどんな世界、どんな次元においてなのか？

これは誰しもが抱く当然の疑問だと思う。若い方はまだこれからですから、そこまでは抱かないと思う。ところが齢80を越えてきますと、もう先が見えてきます。私は今、86歳です。100歳までがんばっても、あと14年しかありません。それに、親しい者が向こうへたくさん行つてますから、そういうことを思いますと、こういうことは当然の疑問というよりも問いかげです。さあ皆さんは、お答えをどう用意なさっていますでしょうか？

では、旧約聖書はどう言っているか？ 新約聖書はどう言っているか？ その聖書の記述をたどってみたいと思います。

### ● 枯骨の復活（エゼキエル37章）

そこです、旧約聖書のエゼキエル書、これは凄いですよ。ここにエッセンスだけを書きました。まずエッセンスを読んで、それから原典の聖書に当たってみます。

#### 《Ⅱ 旧約聖書の記述から》

（Ⅰ）エゼキエル書37章に、枯骨の復活の記事がある。

エゼキエルが主の霊に満たされて谷に入った。そこには多くの枯骨が満ちていた。エゼキエルが主なる神の命に従って主の言葉を伝えると肉体が形成され、さらに息に預言すると息が体に入って彼らは生き返り、大いなる群衆となった。エゼキエルに賜わったこの「異象」は、人間の生命は肉体の死では終らない事を示している。》

そういう幻なんです。このエゼキエル書37章をちよつと読んでみます。これは口語訳聖書（1987年版）で読めます。

「主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊に満たして出て行かせ、谷の中にわたしを置かれた。そこには骨が満ちていた。<sup>2</sup>彼はわたしに谷の周囲を行きめぐらせた。見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた。<sup>3</sup>彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの骨は、生き返ることができるのか」。わたしは答えた、「主なる神よ、あなたはご存じです」。<sup>4</sup>彼はまたわたしに言われた、「これらの骨に預言して、言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。<sup>5</sup>主なる神はこれらの骨にこう言われる、見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす。<sup>6</sup>わたしはあなたがたの上に筋を与え、肉を生じさせ、皮でおおい、あなたがたのうちに息を与



えて生かす。そこであなたがたはわたしが生かすことを悟る。」  
この6節の、「主は生かし給うお方、生命を与える方である」と、そのことをこの枯骨の甦りを通して知るようということ。そこでエゼキエルは、

7 わたしは命じられたように預言したが、わたしが預言した時、声があった。  
見よ、動く音があり、骨と骨が集まって相つらなつた。<sup>8</sup>わたしが見ていると、  
その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおつたが、息はそこになかつた。  
9 時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。  
主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たち  
の上に吹き、彼らを生かせ」。<sup>10</sup>そこでわたしが命じられたように預言すると、  
息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる  
群衆となつた。

<sup>11</sup>そこで彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全  
家である。見よ、彼らは言う、『われわれの骨は枯れ、われわれの望みは尽き、  
われわれは絶え果てる』と。<sup>12</sup>それゆえ彼らに預言して言え。主なる神はこ  
う言われる、わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがた  
を墓からとりあげて、イスラエルの地にはいらせる。<sup>13</sup>わが民よ、わたしが  
あなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる時、あなたがたは、  
わたしが主であることを悟る。<sup>14</sup>わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置  
いて、あなたがたを生かし、あなたがたをその地に安住させる時、あなたが  
たは、主なるわたしがこれを言い、これをおこなつたことを悟ると、主は言  
われる。」（エゼキエル37・1〜14）

今読みましたのは37章の1節から14節までで、この記述だつて凄いでしょ。いくら幻だ  
と言いましても、こんな生々しいことがいかにもビビッドに（生き生きと）書かれている。

●いのちを墓からあがないだす（詩篇103篇）

それから次に、詩篇第103篇第1〜5節をここに引用いたしました。

《（2）詩篇第103篇（ダビデの歌） 1〜5節

「1 わがたましいよ、主をほめよ。わが内なるすべてのものよ、その聖なる御  
名をほめよ。<sup>2</sup>わがたましいよ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。  
<sup>3</sup>主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、<sup>4</sup>あな  
たのいのちを墓からあがないだし、慈しみと憐れみとをあなたにこうむら  
せ、<sup>5</sup>あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもつてあなたを飽き足らせ  
られる。こうしてあなたは若返つて、わしのように新たになる。」《

非常に元気づけられる言葉ですね。6節以下を読んでもみます。



「<sup>6</sup>主はすべてしえたげられる者のために正義と公正とを行われる。<sup>7</sup>主はおのれの道をモーセに知らせ、おのれのしわざをイスラエルの人々に知らせられた。<sup>8</sup>主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。<sup>9</sup>主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない。<sup>10</sup>主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。<sup>11</sup>天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、<sup>12</sup>東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。<sup>13</sup>父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。<sup>14</sup>主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである。<sup>15</sup>人は、そのよわいは草のごとく、その栄えは野の花にひとしい。<sup>16</sup>風がその上を過ぎると、うせて跡なく、その場所にきいても、もはやそれを知らない。<sup>17</sup>しかし主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで、主を恐れる者の上であり、その義は子らの子に及び、<sup>18</sup>その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。<sup>19</sup>主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める。<sup>20</sup>主の使たちよ、そのみ言葉の声を聞いて、これを行う勇士たちよ、主をほめまつれ。<sup>21</sup>そのすべての万軍よ、そのみこころを行うしもべたちよ、主をほめよ。<sup>22</sup>主が造られたすべての物よ、そのまつりごとの下にあるすべての所で、主をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。」

このダビデの歌は素晴らしい神讚美の歌ですね。この始めの方にありました、

「<sup>3</sup>主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、<sup>4</sup>あなたのいのちを墓からあがないだし、慈しみと憐れみとをあなたにこうむらせ、<sup>5</sup>あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、鷲のように新たになる。」

これを我々に実現してくださいだったのがイエス・キリストなんです。イエス・キリストはここでダビデが歌っているこれを引きとって、それを実現された。福音書を読みますと、死人をも甦らせ、様々の素晴らしいことをしていかれた。ところが、当時の人々はそれを御利益的に受けとって、

「この人を捕まえておけばもう大丈夫だ」

という形で、

「神の御意がそこに現れている。やがて到来する神の国においてはこういうことが現実化する」

と、そういうふうには受けとらなくて、

「今この目にみえる所で、この人を捕まえて、やってもらおうじゃないか」



と。つまり、御利益的に受けとった。そして最後は十字架に付けて殺してしまおうという、それが人間の現実でありました。しかも、その十字架につけて殺されるということも、ちやんとイザヤ書53章で預言されている。イエスはそれをご自分に関わる預言として受けとって、その通りのことを実現された。

そういうことですので、この旧約・新約の両聖書、この二つは非常に奥が深い。ダビデの時代というのは三千年も前です。モーセよりもつと前です。アブラハムから始まって、ユダヤの民族の歴史であるとともに、そこには世界に対するメッセージがこめられている。そして、その中からイエス・キリストがおいでになって、わずか三年ばかりの伝道によって世界を変えていられるきっかけになったんです。十字架に付けて殺されたけれども、どっこい死につばなしではない。預言通り三日目に甦る。息を吹き返したのではない。変貌された。霊体となって輝く姿で現れて来られて、天に昇っていかれた。そして、弟子たちにお命じになった。

「祈り待ちなさい。天から聖霊が注がれるから」

と。それが五旬節の日の朝に起こった。ペンテコステと言ってます。そこから弟子たちの伝道が始まりました。人間わざではできないことです。天に昇られたイエスが聖霊の姿で弟子たちへ乗り移って、聖霊なるキリストと弟子たちとの二人三脚で御業を展開していった。それが使徒行伝に記されています。ですから、あそこに書かれていることはみんな本当だと私は思っている。それを人間的な、理性的な頭で受けとめようとするとは、

「こんなバカなことがあるはずはない」

とか、そういうふうなことになるかもしれませんが。人間の理性の中におさまるような神さまではないですよ。そんな神さまなら、小説家がどんどん作りだしてくれると思う。でも、旧約聖書、新約聖書は、その中でも福音書それからパウロの手紙その他は、際立って素晴らしい内容を伝えていきますから、そのつもりで我々は受けとっていかないと、それはとてもじゃない、受けとれるはずがありません。まあそんなことが私の感想です。

### ● ナインの若者（ルカ7章）

次に、「イエス・キリストの言葉と御業から」というところを辿ってみたいと思います。

#### 《Ⅲ 新約聖書の福音書および使徒行伝から

##### Ⅰ イエス・キリストの言葉と御業から

(1) イエスの愛の御業は、病人を癒し、死人をも甦らせる事において顕わされた。印象深いのは、独り息子で母は寡婦という境遇のナインの若者の柩に手をつけて、

「若者よ、起きよ」と呼びかけて生き返らせた話（ルカ伝7章11〜17節）、会堂司ヤイロの12歳の娘を「タリタ、クミ」（少女よ、さあ、起きなさい）との言葉で生き返らせた話（マルコ伝5章41節、ルカ伝8章54節）、死んで4日間も墓の中に置かれていたラザ



口を生き返らせた話（ヨハネ伝11章1〜44節）などである。このようなイエスの活動は、洗礼者ヨハネが獄中からイエスの御業について聞いたただした時の以下のような答えによく顕れている。》

イエスの道案内をするような露払いの役目をしたあのバプテスマのヨハネが躓きまして、「イエスは来るやいなや、激しい審判をなさる」と信じていた。ところが、イエスのなさっていることは、審判どころか、優しいんですよ。だから、躓く。

「私の思いがちがいでしょうか。他にもつと本当のお方がおいでになるのを待つべきでしょうか」

なんてことを、獄中のヨハネが弟子に問い合わせさせた。その時にイエスは答えられた。

《「行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞こえ、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない者は、さいわいである。》

これがヨハネに対する答えだった。

そこでも、ここに引用しましたナインの若者のお話を見ましよう。ルカ伝7章11節から読みます。

「11そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。12町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとつてひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。13主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。14そして近寄って棺に手をかけられると、かついである者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。15すると、死人が起き上がった物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。16人々はみな恐れをいだき、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言つて、神をほめたたえた。17イエスについてのこの話は、ユダヤ全土およびその附近のいたる所にひろまった。

こういう話を聞いた獄中のヨハネが、

「そんなイエスを自分は期待していなかった。もつともつと激しい審判をなさる、そういう方だと思っていたのに」

と。やっていることはみんな愛そのものなんです。審判なんてどこにも見えない。

18ヨハネの弟子たちは、これらのことを全部彼に報告した。するとヨハネは弟子の中からふたりの者を呼んで、19主のもとに送り、「きたるべきかた」は



あなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか」と尋ねさせた。<sup>20</sup>そこで、この人たちがイエスのもとにきて言った、「わたしたちはバプテスマのヨハネからの使ですが、『きたるべきかた』はあなたなのですか、それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか、とヨハネが尋ねています」。<sup>21</sup>そのとき、イエスはさまざまの病苦と悪霊とに悩む人々をいやし、また多くの盲人を見えるようにしておられたが、<sup>22</sup>答えて言われた、「行って、あなたがたが見聞きしたことを、ヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞こえ、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている」。<sup>23</sup>わたしにつまずかない者は、さいわいである」。

このようにお答えになった。さらにまた、話は続いています。

<sup>24</sup>ヨハネの使が行ってしまうと、イエスはヨハネのことを群衆に語りはじめられた、「あなたがたは、何を見に荒野に出てきたのか。風に揺らぐ葦であるか。<sup>25</sup>では、何を見に出てきたのか。柔らかい着物をまとった人か。きらびやかに着かぎって、ぜいたくに暮している人々なら、宮殿にいる」。<sup>26</sup>では、何を見に出てきたのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言うが、預言者以上の者である」。<sup>27</sup>『見よ、わたしは使をあなたの先につかわし、あなたの前に道を整えさせるであろう』と書いてあるのは、この人のことである」。<sup>28</sup>あなたがたに言うておく。女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない。しかし、神の国で最も小さい者も、彼よりは大きい」。<sup>29</sup>（これを聞いた民衆は皆、また取税人たちも、ヨハネのバプテスマを受けて神の正しいことを認めた」。<sup>30</sup>しかし、パリサイ人と律法学者たちとは彼からバプテスマを受けないうで、自分たちに対する神のみこころを無にした」）<sup>31</sup>だから今の時代の人々を何に比べようか。彼らは何に似ているか」。<sup>32</sup>それは子供たちが広場にすわって、互に呼びかけ、『わたしたちが笛を吹いたのに、あなたたちは踊ってくれない。』と、泣いてくれなかった』と、言うのに似ている。

これは有名ですね、「われ笛吹けども汝らは踊らず」と、伝えられています。

<sup>33</sup>なぜなら、バプテスマのヨハネがきて、パンを食べることも、ぶどう酒を飲むこともしないと、あなたがたは、あれは悪霊につかれていたのだ、と言っている者、大酒を飲む者、また取税人、罪人の仲間だ、と言う」。<sup>35</sup>しかし、知恵の正しいことは、そのすべての子が証明する」

その他まだまだ続いていきますが、もうこれだけにします。こういうところを読むだけでも、皆さん、なにか本当にわくわくしませか。そういう場に自分を置いて、イエスがそ



ここに来られた。寡婦が居る。柩に手を置かれて、

「若者よ、出てこい！」

と言ったら、出てきた。ウワーツすごいと、皆さん、驚いて読んでくださいよ。小池辰雄は言いました、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と。驚嘆驚倒する。「ギョギョギョッ」というサカナ君、あれに負けたらダメだよというわけです（笑）。そうでないと、読んだことにはならないよと言われた。私もそういう思いで聖書にぶつかっています。これがルカ伝17章です。

### ●会堂司ヤイロの娘（マルコ5章）

それから、会堂司つかさヤイロの娘、「タリタ、クミ！」のところも見ておきましょう。マルコ伝5章41節。とにかく、会堂司ヤイロというのは、自分のお嬢さんが重い病気で、イエスに来てほしいと使いを出して頼んだ。イエスは、

「ああ、行ってやるよ」

と言われて行きだしたけれども、途中でトラブルがありました。長年、血漏を患っている女性がこっそりイエスの後に行つて、イエスの衣の裾すそに触れた。そしたら、イエスの体から生命が流れていって、直ちに癒された。それをイエスはお気づきになって、

「誰が触ったのか」

と。女性は恐れおののいていた。出血の汚れた女は神さまの前に出られないというモーセの律法に従つて、はるか後からせめて衣の裾にでも触れば何とかしていただけだと思つて触つたら、力が流れていって直ちに癒された。イエスも気づかれた。そこでイエスと女性との問答が途中にあります。そういうことがあつて、そういうしているうちに、ヤイロの家から使いがきて、

「残念ですが、お嬢さんはお亡くなりました。もう先生をお呼びしても

無駄です」

と。ところがイエスは、

「恐れることはない。ただ信じなさい」

と、会堂司を励まして、ペテロ、ヨハネ、ヤコブとこの会堂司を連れて、ヤイロの家に行つてみられたら、その通り、子どもは死んでいた。イエスは、

「子どもは死んだのではない。眠っているだけだ」

と仰る。死んだことはご存知だけでも、そういう表現をなさった。

「人々はイエスをあざ笑つた」

と書いてある。イエスは、

「みんなをそこから追い払え」



と。神の御業みわざが働く時には、不信仰な人間がおつたら邪魔になる。だから、そういう神の働きを妨げるような連中を全部追ひ払って、本当に神に依りすがる、心を一つにして祈る、そういう者だけで祈る。そうすると、そこに御力がはたらく。それをイエスはここでなさっているんです。

「<sup>36</sup>イエスはその話している言葉を聞き流して、会堂司に言われた、「恐れることとはない。ただ信じなさい」。<sup>37</sup>そしてペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネのほかは、ついて来ることを、だれにもお許しにならなかった。<sup>38</sup>彼らが会堂司の家に着くと、イエスは人々が大声で泣いたり、叫んだりして、騒いでいるのをごらんになり、<sup>39</sup>内にはいつて、彼らに言われた、「なぜ泣き騒いでいるのか。子供は死んだのではない。眠っているだけである」。<sup>40</sup>人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなの者を外に出し、子供の父母と供の者たちだけを連れて、子供のいる所にはいつて行かれた。<sup>41</sup>そして子供の手を取って、「タリタ、クミ」と言われた。それは、「少女よ、さあ、起きなさい」という意味である。<sup>42</sup>すると、少女はすぐに起き上がって、歩き出した。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常な驚きに打たれた。

<sup>43</sup>イエスは、だれにもこの事を知らすなど、きびしく彼らに命じ、また、少女に食物を与えるようにと言われた。」（マルコ5・36〜43）

イエスは、見せびらかしのために奇跡をなさっていない。やむにやまれず、こういう御業をなさっている。いわば奥の手を使っておられるわけです。そんなものを宣伝に使われたら困るといっわけ、

「誰にも語るな」

と。ところが、やっていただいた連中はみんなうれしそうにしゃべりまくるんですよ。そういうのがあちらこちらに出てきます。正に親の心、子知らず。神の心を人は知らずということが言えると思います。

この「タリタ、クミ」というのは本当に感動でしょ。皆さん、打ちひしがれている時に、「タリタ、クミ！」

と自分に呼びかけてください。

「さあ、起き上がれ！」

と。キリストが働いてくださる。キリストの霊があなたを捕まえて立たせてくださる。人間からは出てきません。人間からは溜め息しか出てきません。嘆きの言葉しか出てきません。でも、神さまから生命が流れてくる。力が流れてくる。そしたら、起き上がるんです。そのくらいの神さまでなかつたら、信頼するに、信ずるに値しませんよ。皆さん本当に、なめてはいかんですよ、聖書の神さまは。と私は思います。

私は24歳でキリストに救っていただいて、それから60年以上になりますが、ますますこ



のキリストの世界は凄いなあと——もう向こうが近いですから、私も（笑）——いよいよそう思いますよ。本当にそういう靈の次元、特にヨハネ伝なんか、凄く高い靈的レベルで書かれています。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることできない」

「肉から生まれた者は肉である。靈から生まれた者は靈であって、靈なる新しい人でなければ、神の国に入ることができない」

とか、いっぱいある。そういうものがだんだん、自分の何か生命として入ってくるような気がいたします。

「先生はもう向こうが近いんだな」

なんて、皆さんは思うかもしれないけれども（笑）。

年寄りが輝いていなければ、年寄りではないです。年寄りは輝くものなんです。それをキリストは我々に下さるんですよ。そういうふうなことを思っております。

### ●ラザロの復活（ヨハネ11章）

次に、ラザロの復活、これも凄いですよ。ヨハネ伝11章。墓に葬られて四日も経って、臭くなっているラザロ。しかも、イエスは弟子たちに、

「私の愛するラザロは死んだ」

と、ちゃんと仰っている。

「でも、私がある場に居合わせなくてよかったよ。それは神さまの御力の証になるから」

と、そういうことを仰っている。ヨハネ伝11章1節から読みます。

「1さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとその姉妹マルタの村

ベタニヤの人であった。2このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、

主の足をふいた女であって、病氣であったのは、彼女の兄弟ラザロであった。

3姉妹たちは人をイエスのもとにつかわして、「主よ、ただ今、あなたが愛し

ておられる者が病氣をしています」と言わせた。4イエスはそれを聞いて言

われた、「この病氣は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、

神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。

皆さんの人生そのものがこれなんです。自分の幸せのための人生ではない。キリストによつて新しく創り変えられた。それは神の栄光の現れとしての新しき我、これを賜るんです。旧い我はどうせ死にます。肉体はボロボロになります。それで靈魂も一緒に土に葬られたら、たまらんですよ。たとい肉体はボロボロになろうと、なかに賜った新しい靈の生命、これはキリストの靈がくつついていらつしやるから、肉体が亡びたら、靈は羽ばたいて天に昇っていく。これが



「光輝高霊者」（後期高齢者）

の特権なんですよ。私は「光り輝く高次の霊の者」「光輝高霊者」と書く。

<sup>5</sup> イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。<sup>6</sup> ラザロが病気であることを聞いてから、なおおつか、そのおられた所に滞在された。<sup>7</sup> それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。<sup>8</sup> 弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほどあなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるのですか」。<sup>9</sup> イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。昼間あるけば、人はつまりくことはない。この世の光を見ているからである。<sup>10</sup> しかし、夜あるけば、つまりく。その人のうちに、光がないからである」。<sup>11</sup> そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。<sup>12</sup>すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう」。<sup>13</sup> イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。<sup>14</sup>するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ」。<sup>15</sup>そして、わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう」。<sup>16</sup>するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

もうこれはイエスに身の危険が迫っている事態なんです。だから、「先生と一緒に死のう」なんて言った。

<sup>17</sup> さて、イエスが行ってごらんになると、ラザロはすでに四日間も墓の中に置かれていた。<sup>18</sup> ベタニヤはエルサレムに近く、二十五丁ばかり離れたところにあつた。<sup>19</sup> 大ぜいのユダヤ人が、その兄弟のことで、マルタとマリヤとを慰めようとしてきていた。<sup>20</sup> マルタはイエスがこられたと聞いて、出迎えに行つたが、マリヤは家ですわっていた。<sup>21</sup> マルタはイエスに言った、「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう。<sup>22</sup> しかし、あなたがどんなことをお願いになつても、神はかなえて下さることを、わたしは今でも存じています」。<sup>23</sup> イエスはマルタに言われた、「あなたの兄弟はよみがえるであろう」。<sup>24</sup> マルタは言った、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」。<sup>25</sup> イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる」。<sup>26</sup> また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこの信じるか」。



この素晴らしい言葉を、皆さん、絶対に自分の中に入れておいてください。

「我は復活なり、生命なり。我を信する者は死すとも生きん。およそ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし。汝これを信するか」

と。文語訳の方が格調が高いと思いますよ。でもまあ、妥協して口語訳でいきますけれども。ここにいらっしゃる方はだいたい文語訳が適切な方ばかりですので。

27 マルタはイエスに言った、「主よ、信じます。あなたがこの世にきたるべきキリスト、神の御子<sup>みこ</sup>であると信じております」。28 マルタはこう言ってから、帰って姉妹のマリヤを呼び、「先生がおいになつて、あなたを呼んでおられます」と小声で言った。29 これを聞いたマリヤはすぐ立ち上がって、イエスのもとに行つた。30 イエスはまだ村に、はいつてこられず、マルタがお迎えしたその場所におられた。31 マリヤと一緒に家について彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、彼女は墓に泣きに行くのであろうと思ひ、そのあとからついて行つた。32 マリヤは、イエスのおられる所に行つてお目にかかり、その足もとにひれ伏して言つた、

この「足もとにひれ伏して」というのが大事な姿です。マリヤ、マルタ、ラザロは非常にイエスとは仲がいいんです、家族みたいなんです。けれども、一たび神の御子キリストというお方としてイエスに向かう時には、「足もとに平伏す<sup>ひれふ</sup>」という姿が——「親しき仲にも礼儀あり」と申しますが——やはりこれは非常に素晴らしい姿だと、私は思います。

「主よ、もしあなたがここにいて下さつたなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」。33 イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。35 イエスは涙を流された。

イエスも涙もろいお方なんですよね。自分がこれからラザロを甦らせようとなぎつていて、けれども、現にラザロが墓に葬られ、また人々が涙を流して泣いている。その姿に——もらい泣きといいますかね——深い同情を示された。そんなふうに思います。

36 するとユダヤ人たちは言った、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」。

37 しかし、彼らのある人たちは言った、「あの盲人の目をあけたこの人でも、これは9章で、生まれながらの盲人で乞食をしていた盲人の目を癒されたお話が出てきています。弟子たちが、

「いったい誰のせいでこんな盲人になつたんですか、先祖が悪いんですか、自分なんですか、誰ですか」

なんて。それに対して、

「神の御業<sup>みわざ</sup>が現れるためだよ」



とキリストはお答えになった。

「誰のせいでもない。神の御業がこの人のうえに現れるためである」

と。あの言葉も私には非常に大きな慰めです。人はすべて原因結果を尋ねるんです。

「こんなことになったのは誰のせいや？」

と、原因探しをやる。因果応報。人は蒔いた種を刈り取る。これも、あるところでは正しいんですけども、しかしながら、そうでないこともたくさんある。誰のせいでもない。じゃ、何のためか。神の栄光がそこに現れるためである。神の御業が現れるためである。どうぞ、皆さんはいろんな不如意ふによういなことにぶつかった時に、

「なんでこんなことが？」

ということが起こった時、そのとき不信仰におちいらないうでください。神の御業がこの上に現れるため、この事態を通して神さまは何かを世に示そうとなさっている。

「主よ、あなたを信じて、平安でおられますから」

という、そういう信を貫いていただきたいと思います。

ラザロを死なせないようには、できなかったのか。<sup>38</sup> イエスはまた激しく感

動して、墓にはいられた。それは洞穴であって、そこに石がはめてあった。

<sup>39</sup> イエスは言われた、「石を取りのけなさい」。

これはおもしろいですね。石を取り除くのは人間でもできることです。人間でできることはやりなさいと。神さましかできないこと、それが、イエスがなさろうとしている業なんです。イエスがここで、奇跡の力で石がコロコロ転がるようことをなさったらおかしいですよ。そんなことはイエスに求めるべきではない。石を除ける、そういうことは人間がちゃんとやる。ところが、四日経って臭くなっているラザロを生き返らせる、これは神・キリストしかできないことですよ。

死んだラザロの姉妹マルタが言った、「主よ、もう臭くなっております。四日

もたっていますから」。<sup>40</sup> イエスは彼女に言われた、「もし信じるなら神の栄光

を見るであろうと、あなたに言ったではないか」。<sup>41</sup> 人々は石を取りのけた。

すると、イエスは目を天にむけて言われた、

ここからがイエスの祈りです。

「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。

祈る前から、

「あなたはもう既に祈りを聴いてくださっていることを感謝します」

と。これがイエスの素晴らしいところです。人間というのは結果を見ないと信じない。自然科学はすべて

「疑え、疑え、疑え」

という。そして結果が出てから、初めてデータによって証明する。神さまの世界は逆です。



信じて、それに依りかかっていくと、それが実現していく。全く逆ですから。

42 あなたがいつでもわたしの願いを聞きいれて下さることを、よく知っています。しかし、こう申しますのは、そばに立っている人々に、あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります」。43 こう言いながら、大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた。44 すると、死人は手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、出てきた。イエスは人々に言われた、「彼をほどいてやって、帰らせなさい」。(ヨハネ11:1~44)

ね、凄いでしょ。たぶん理性的な知的な人は、

「こんなことはあるはずがない。こんなものは尾ひれを付けたでつちあげだ」

くらいにしか思わないでしょう。私は正直にこの通りだと思っと思っています。この通りの方だからこそ、我々を死から贖いだし、そして私たちを天に導いてくださる。しかも、何十億の人がおろうと関わりなく、イエスは御業をなし給う。そういうお方である。そういうふうに私は受けとっています。これがラザロですね。

《このようなイエスの活動は、洗礼者ヨハネが獄中からイエスの御業について問いただした時の以下のような答えによく頷れている。

「行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない者は、さいわいである」。

ヨハネはすっかり躓いてしまった。自分の描いていたビジョン通りのイエスではなかった。そういうことですね。

### ● イエス自身の死と復活

イエスの御業をずっと見てきました。簡潔に見ました。では、ご自身はどうなんだと。

《(2) イエス自身の死と復活については、

第1回目がマタイ伝16章21~23節、マルコ伝8章31~33節、ルカ伝9章22節、

第2回目がマタイ伝17章22~23節、マルコ伝9章30~32節、ルカ伝9章44節、

第3回目がマタイ伝20章17~19節、マルコ伝10章32~34節、ルカ伝18章31~34節

に記述されている。》

それぞれ書かれていますので、どうぞ、ここを後でじっくりご覧になってください。

にもかかわらず弟子たちは信じなかったんです。イエスがあのように三回も、

「私は苦しみを受け、殺され、そして三日目に甦る」

と、ハッキリと仰った。ところが、弟子たちはうわのそら。だから、ルカ伝24章の、イエスが復活されたその直後の弟子たちはもうガツカリして、



「我々が頼りにしていたこのお方はとうとう死んでしまった。しかも、我々をまるで嘲るように、女たちが行ってみたら屍体がない。しかも、天使が言うには『イエスは甦った』なんて言われて、もう踏んだり蹴ったりですわ」

と、いかに弟子たちがイエスの語られたことをまともに受けとっていないか。いや、受けとることができなかったか。死人が甦るなんてことは考えられなかったんですね。だから、弟子たちを責めるわけにいかない。

ところが、現にイエスは復活されて、弟子たちに現れた。ですから、弟子たちの伝道はまず、「イエスは復活された」

という、復活伝道なんです。普通の人間にとつてあり得ないことが、復活というイエスのご自身の栄化の姿、復活という姿において示された。

「この方こそ救い主である」

ということを宣言した。人々が、宗教上の犯罪人として十字架につけて殺したイエス。それをまた信じている同じ弟子たちは、いわば宗教家からしたら敵なんです。同じように十字架につけて殺すに価する人たちです。ところが、彼らはこの復活のイエスに出会い、そしてあのペンテコステの時に聖霊が降ってきて、もう何をも恐れずに体をはって伝道に乗り出した。これが使徒行伝のペンテコステ以降の弟子たちの姿です。

ということとは、私たちも、我々の理性の力、意志の力——いわゆる肉の力といえます——生まれながらの人間から出てくる力で、神の国を伝えたり、いわんや生命をわかち与えたりは、できっこありません。我々自身が聖霊によって新しい人に創り変えられて、

「我は主と共に十字架につけられたり。もはや我生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリストがわがうちに生きてあり給うなり」

と。ガラテヤ書2章20節の告白、それを私たち自身の告白として、

「私は肉体では生きています。しかし、もはや本当の私は、もう肉体は十字架で既に死んだものだ、葬られたものだ。私の本当の生命は天に記されている。そして、霊の生命、これがイエスの生命と一つになって、神の御業がそこに展開していく。

それが本当の私だ」

という、そういうことをハッキリ受けとつていく。命題ではありません。霊的現実、見えない霊的現実を受けとつて、それをベースに歩んで行く。これがあたかもペテロが波の上を歩いて行ったように——イエスだけを見つめて歩いて行ったら、波の上を歩いたでしょう——それと同じように。我々の生なまの現実はいつても変わらない。けれども、生なまのこの世の中に生きていながら、私たちの霊的現実、ペテロが波の上を歩いて行ったように、キリストによって引つ張られて、不可能を可能として歩いていくような、そういう歩き方をさせられるんです。そしたら、不思議なことが起こって当たり前なんです。やたらと起こる必要はありません。けれども、神さまは必要とあらば、誰を通してでも御業をなさる。



「もはや我生くるにあらず。御霊のキリストわがうちに在りて生き給うなり」と、これが本当ならば、そうなるはずでしょ。皆さんお一人おひとりがそうなんですよ。特別な人だけが、選ばれた人だけが、そうなるんじゃない。キリストを受けとった人はみんな変わるんです。みんな変貌する。輝いていくんです。誰も自分を求めない。

「自分の人生は神・キリストの栄光のため」

というふうに変わるんです、目的が。それまでは「自分のため」です。教育は、

「すべて自分のため、自分を最大限生かしなさい」

という。やむをえません、そういうことは。けれども、キリストは、

「己を生かさんと思う者はこれを失い、わがため福音のため己を捨ててかかる

者は永遠の生命を得る」

とハッキリと、受難の告知と共に人々に何回も言っておられます。あの通りです。また、

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。死なば多くの果を結ぶべし」

と。イエスは「一粒の麦」となって死なれた。同時に我々もみな一粒の麦となって、この世には死んでいく。しかし、我々の霊の生命は人々を生かしていく。そういう霊的現実を我々は歩かされている。どなたさまもそうなんです。

「誰でもキリストに在るならば、新しく創られたものである。見よ、一切は新しくなりたり」

これはコリント人への手紙の中の言葉です。そういう聖書の中で、福音書で、あるいは使徒たちの手紙で語られていることは全部、

「然り、アーメン。その通りです」

と、そうやって受けとっていけば、どんどんそれは実現していく。皆さんのものと成っていく。

「それは信じられないわ」

と断っていたら、いつまでたつても変わらない。そういう世界ですね。

はい、それでは、「ご自身の死と復活」のところは、皆さんに後ほど確かめていただくことにして、その先へ行きましょう。

## ●イエスの復活と弟子の歓喜

《2 イエスの復活と弟子の歓喜

マタイ伝28章1〜10節、マルコ伝16章1〜8節、ルカ伝24章1〜11節》

このマタイ伝28章1〜10節のあたりを確かめてみましょう。これは復活の場面です。

「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた。すると、大きな地震が起った。それは主



の使が天から下って、そこにきて石をわきへころがし、その上にすわったからである。<sup>3</sup>その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように真白であった。<sup>4</sup>見張りをしていた人たちは、恐ろしさの余り震えあがって、死人のようにになった。<sup>5</sup>この御使は女たちにむかって言った、「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかつているが、<sup>6</sup>もうここにはおられない。かねて言われたとおり、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんください。<sup>7</sup>そして、急いで行って、弟子たちにごう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに、これだけ言っておく。<sup>8</sup>そこで女たちは恐れながらも大喜びで、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。<sup>9</sup>すると、イエスは彼らに出会って、「平安あれ」と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。<sup>10</sup>そのとき、イエスは彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい。」（マタイ28・1〜10）

それから、マルコ伝16章1〜8節、

「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。<sup>2</sup>そして週の初めの日に、早朝、日の出のころ墓に行った。<sup>3</sup>そして、彼らは「だが、わたしたちのために、墓の入口から石をころがしてくれませんか」と話し合っていた。<sup>4</sup>ところが、目をあげて見ると、石はすでにころがしてあった。この石は非常に大きかった。<sup>5</sup>墓の中にはいると、右手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て、非常に驚いた。<sup>6</sup>するとこの若者は言った、「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない。ごらんください、ここがお納めした場所である。<sup>7</sup>今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう、と」。<sup>8</sup>女たちはおののき恐れながら、墓から出て逃げ去った。そして、人には何も言わなかった。恐ろしかったからである。」（マルコ16・1〜8）

ちよつと恐ろしい場面が描かれていますね、このマルコでは、それから次は、ルカ伝24章、ここは美しく描かれています。

「週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。<sup>2</sup>ところが、石が墓からころがしてあるので、<sup>3</sup>中にはいつてみると、



主イエスのからだが見当らなかった。<sup>4</sup>そのため途方にくれていると、見よ、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた。<sup>5</sup>女たちは驚き恐れて、顔を地に伏せていると、このふたりの者が言った、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。<sup>6</sup>そのかたは、ここにはおられない。

この言葉はいいですね。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」

これをちよつと社会生活の中に適用しますと、

「人間の中に助けを求めるのではない。神さまご自身に助けを求めなさい」

と、そんなふうになんか読み替えることができますね。

「あなた方はなぜ、本当の力、生命を、この世の死んだものの中に求めているのか、社会に求めるのか。生命を持っておられる方、万能なる神ご自身に求めてごらん」と、そんなふうになんか読み替えていただければいいのではないかと思います。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。<sup>6</sup>そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出さなさい。<sup>7</sup>すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえり、と仰せられたではないか」。<sup>8</sup>そこで女たちはその言葉を思い出し、<sup>9</sup>墓から帰って、これらいつさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。<sup>10</sup>この女たちというのは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ、およびヤコブの母マリヤであった。彼女たちと一緒にいたほかの女たちも、このことを使徒たちには話した。

ところがですよ、使徒たちは全く信じなかったと書いてある。

11ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。

人間というのはこんなもんなんですよ。弟子たちに

「私は三日目に甦る」

とハッキリ三回、告知しておられる。にもかかわらず、それが現実に起こって、そのことを確かめた女たちが、それをいわば嬉々として報告した。ところが、それを弟子たちは、「バカバカしくて信じられないわ」

と。これが人間なんです。そうですね。そうですね。

「愚かな話のように思われて、誰もそれを信じなかった」

という。ところが、ペテロだけが確かめに行った。

12ペテロは立って墓へ走って行き、かがんで中を見ると、亜麻布だけがそこにあつたので、事の次第を不思議に思いながら帰って行った。」（ルカ24・1）



墓に行ってみたら、やはり墓は空っぽだった。亜麻布だけがそこに置いてあったので、この次第を不思議に思いながら帰って行った。けれどもまだ、イエスが復活されるということには全然思いあたつていない。

《復活されたイエスと弟子たちの出会いで感動的なのは、エマオへと旅立った二人の弟子の道伴者として旅人の姿で弟子と語り合い、ご自身の受難と栄光について解き明かされ、エマオ村の近くの宿で食事の席に付かれた時、パンを祝福して割いて渡される様子から、それがイエスだとわかった瞬間に御姿が見えなくなった。そこで、直ぐにエルサレムの弟子仲間のところへ帰り着くと、イエスが彼らの中にお立ちになって彼らを励まされたという記事である。》

### ●弟子たちの宣教（使徒行伝3章）

その次に行きます。

#### 《3 エルサレムの弟子たちの宣教

使徒行伝2章の五旬節の日の「聖霊の降臨（聖霊のバプテスマ）」以降の弟子たちは、復活されたイエスこそが「救い主」であることを高らかに謳い、その御名によって、癒しの業を展開して行った。》

一か所だけ見ておきましょう。ペテロが生まれながら足の立たない乞食を立たしめた、そういう場面が使徒行伝の3章に出てきている。

「さて、ペテロとヨハネとが、午後三時の祈のときに宮に上ろうとしていると、<sup>2</sup>生れながら足のきかない男が、かかえられてきた。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日、「美しの門」と呼ばれる宮の門のところに置かれていた者である。<sup>3</sup>彼は、ペテロとヨハネとが、宮にはいつて行こうとしているのを見て、施しをこうた。<sup>4</sup>ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。<sup>5</sup>彼は何かもらえるのだろうかと期待して、ふたりに注目していると、<sup>6</sup>ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」。

名である。名は体を表しますね。イエス・キリストの名である。この「キリストの名によって歩きなさい」と。

<sup>7</sup>こう言って彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、<sup>8</sup>踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った。<sup>9</sup>民衆はみな、彼が歩き回り、また神をさんびしているのを見、<sup>10</sup>これが宮の「美



しの門」のそばにすわって、施しをこうしていた者であると知り、彼の身に起ったことについて、驚き怪しんだ。」（使徒行伝3・1〜10）

以下もずっと書かれてありますが、このあたりは本当に復活されたイエスが弟子たちに乗り移ってさまさまの不思議な御業を展開しておられる。そうすると、学者・パリサイ人、宗教家たちはイエスを宗教的犯罪人として殺した人間ですから、その弟子どもがこんなことをやって、民衆がそれにくつついていく。これは大変なことになるといっているので、さかんに迫害する。ところが、ペテロたちはもうびくともしない。

「人に聴くよりも神に聴くべきである。あんた方が何と言おうと、それよりも

神さまの御言、神がお命じになること、これが最高だ」

と言って、微動だにしなかったという、<sup>たくま</sup>逞しい弟子たちの姿が描かれています。

それから、ペテロが牢屋につながれて、明日処刑されるという晩に地震が、霊震が起きて、鎖が解けて、夢遊病者のようにペテロは第一、第二、第三の門を通り抜けて、そこでハッと我にかえるんです。そして、弟子たちはペテロのことを祈っていた。ペテロは皆のいる所に行つて、ドンドンと戸を叩く。あまりやかましいので、女中がやってきて、そこにペテロがいた。

「あつ、ペテロだ」

と驚きのあまりとんでかえつて、弟子たちに

「ペテロさんが来ていますよ」

と言つたら、また誰も信じなかったというようにことが書いてあります。使徒行伝は実に活き活きと描かれています。

何もあれと同じことが起こらないとダメだとは、私は申しません。けれども、あれが本当の現実だった。あれと同質のキリストがお一人おひとりの中に宿つてくださる。

「えつ、私なんかの中にキリストが宿つてくださる？」

「そうだよ、宿らない理由をあげてごらん」

「いや、私みたいなものが？」

「その私みたいなものをキリストは十字架で片づけたではないの」

「私みたいな罪深いものが？」

「罪は全部、キリストが背負つたではないの」

と。何を言つても、十字架があなたのすべてを贖い<sup>あがな</sup>とり、償い<sup>つぐな</sup>、あなたを完全に罪から解放した。そして、復活の生命を聖霊という姿でたまわっている。

「われ主と共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず、復活のキリ

スト、聖霊のキリストわがうちにありて生き給うなり」

と、さつきから言つてますガラテヤ書2章20〜21節のパウロの告白。それを、どうぞ、皆さんお一人おひとりの生<sup>な</sup>まの告白として、恐れなくて告白してください。きっと、聞いた



人は、

「えっ、あんたが？ あんたみたいのが？」

と、驚くと思うんです。その時に、

「あんたみたいのがと言われる私が変わったんですよ」

「なんで？」

「キリストさまですよ」

と。皆さんは、責任はありません。全部、キリストが責任をとってください。キリストは言われました、

「どんな罪もゆるされる。人の子イエスの悪口をどれだけ言ってもいい。ただし、聖霊に逆らう罪だけは永遠にゆるされない」

と、そう言っておられます。イエスがいかに聖霊という、そのお方を尊んでおられるか、これがよくわかります。

### ●「永遠の生命」の約束（ヨハネ3章）

次に行きましょう。

《4 ヨハネ伝における、イエスによる「永遠の生命」の約束》

「永遠の生命」といえばヨハネ伝です。ヨハネ伝は永遠の生命で満ちあふれています。ただ、残念なのはイエスは、

「終わりの日にその人を甦らせる」

と、いつも「終わりの日」と仰る。私は

「終わりまで待てません。今直ちにでないと困ります」

と言っている。皆さん、待っていられる？ 終わりの日を。いつ来るかわかりませんよ。イエスの時代は、終わりは近かったんです。

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

これがイエスの伝道第一声なんです。神の国が近づいたというのは、審判が近いということ。

「終末が近い。だから、皆さん、生き方を改めて、それに備えよう」

という、そういう終末の迫りの中で、しかも終末は審判を伴いますから、それに用意をしないといかん。そういう緊張感の中で福音は語られているんです。

「明日もまた今日のようにであらん」

なんて、のんびんだらりといつまでも永遠に続く、そんなことではない。迫り、審判、終わり、その前に立たされた人が自分の生き方をひっくり返して、本当に肉の人から霊の人に変貌する。これがイエスの福音の質だと思います。ヨハネ伝は、そういう質の生命のことを「永遠の生命」という言葉で表現していると思う。

ヨハネ伝3章のニコデモとの話。これはおもしろい。ニコデモは当代随一の学者であつ



て尊敬されていた。そのニコデモ先生がこつそりと夜、イエスの所にやってきて、

「神さまがご一緒でないと、あなたがなまじっているようなことは、とても出来るはずがありません。その秘密をちよつと教えてください」

と、尋ねてきた。そしたらイエスは、

「人は新しく生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生れた者は肉である。霊から生れた者は霊である」

ということを言われた。ニコデモは大変とまどつたということが書かれています。「肉から生れた者」というのは、私たち、生まれながらの人間です。これは土から生まれて土に還る。これが宿命です。

まあ、20歳から30歳までがピークでしょうね。あとは下り坂で、70、80となれば、もうどうしようもない。これが世間のいう「後期高齢者」なんですけれども。キリストという霊が宿ると、これが逆転するんです。放物線で書くと普通は20代、30代がピークであとは下り坂。ところが、キリストに出会うということは、幸せな幼児の時代、少年時代、それからだんだん自我に目覚め、空しくなつてどん底にきて——ある人は華嚴の滝に飛び込んだという人もありました。そうでなくても、自殺未遂がいろいろある——そこでキリストに出会いますと、それから上昇のカーブを描いて、放物線はいつまでも上へ昇つていく。だから、上から下つてくる放物線に乗つると、上へ昇つていく。ところが、上へ昇つていく放物線は必ず下に落ちる。これが天の法則なんです。皆さんはどっちですか。もちろん上からおりてきて、どん底でキリストに出会つていただく。そこから上へ向かつて限りなくのぼつていく。それが新しいあなた、皆さんご自身です。

そんなことがこのヨハネ伝3章のニコデモとの会話の中で語られています。

そして、3章16節、これは有名な言葉です。

「<sup>16</sup>神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。<sup>17</sup>神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によつて、この世が救われるためである。<sup>18</sup>彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

<sup>19</sup>そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、

イエスは光として来てくれた。ところが、自分の行いが悪いと、

「光はやばい、暗闇の中に隠れよう」

と、そうやって光を避けて闇を選んでいく。これが審判だということ。それが言われている。

人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。

<sup>20</sup>悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとほしくない。<sup>21</sup>しかし、真理を行っている者は



光に来る。その人のおこないの、神にあつてなされたということが、明らかにされるためである。」(ヨハネ3・16〜21)

以下も素晴らしい言葉が出てきます。31節、

「31上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であつて、地のことを語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。32彼はその見たところ、聞いたところをあかししているが、だれもそのあかしを受けいれない。33しかし、そのあかしを受けいれる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。34神がおつかわしになつたかたは、

神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

これは我々だつてそうなんですよ、キリストだけの専売特許ではありません。

「神がおつかわしになつたかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである」

これは直接にはイエスご自身のことですけれども、我々はイエスによつて、旧い我に死に新しい生命をいただくと、この生命は神の生命なんです。そして、この世に対して神の生命を証していくために、この世につかわされているんです。遣わされた者は、お遣わしくださる方が力と霊を、すべて必要なものを上から下さつて、それを伝えていく。それを原動力として働いていく。

もう自力じりきではありません。それまでは自力です。ところが、十字架で死んだ人間はもう自力ではありません。新しい生命を賜つたものは、いつも神の霊の力で、イエスの生命の力で我々は動いていきます。だから、力みも何もない。ごくナチュラルになる。第二の人、新しき人の誕生です。皆さん、それを全部賜つてください。まだの人は、

「今晚、イエスさま、ください!」  
と。いただきますから。そういうことですよ。

35父は御子を愛して、万物をその手にお与えになつた。36御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神

の怒りがその上にとどまるのである。」(ヨハネ3・31〜36)

そうですね。せっかく、最後の切り札としてイエスを送り込んだ。そのイエスは十字架で無惨な死に方をなされた。けれども、人の罪は全部背負つて死んでくださった。そして、あの栄光の姿で現れた。

「これがあなたの救い主だ」

といって、神さまが至れりつくせりのことをやっているのに、

「そんなもの要らんよ」

なんて断つたら、それは自業自得じごうじとくですよ。まあ向こうの世界に行つてからきつとお気づきになると思うんです。皆さんは先に目覚めている者、先覚者です。開国して、明治の人た



ちが先覚者でなかった。ところが、霊の世界では皆さんが先覚者。そして、まだ目覚めていない人たちを目覚めさせる、

「起きよ、今だよ」

といて甦らせる、そういう聖なる使命をたまわってこの世に遣わされている、そういう方々に変貌していくんです。

●私を食べ、私を飲め（ヨハネ6章）

それから、6章53節から。この6章のところは、

「私の肉を食べる。私を食べ、私を飲め」

と散々、人食い人種みたいなことを仰っている。

「モーセはパンを、マナを与えた。けれども、みんな死んだだろ。結局は死んだではないか。ところが、天から降ってきた私というパンは生命のパンだ。

私を食べる者は死なない」

と。このヨハネ伝6章をしつかり読んでください。皆さんに都合のいいことが書いてあるんだから。都合のわるいことはやはり、

「回避いたします」

とか、そうやって避けるでしょ。ところが、聖書は皆さんに都合のいいことが八割方書いてある。ですから、それは法廷用語では「援用いたします」とか、そうやって自分に有利に用いるように申します。

そして、私が好きなのは6章63節です。

《6章63節「人を生かすものは霊であって、肉は何の役にも立たない。わたし

があなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。》

本当に人を生かすものは霊であって、肉ではない。「肉」というのはこの場合は、人間的なもの、生まれながらの人間から出るもの、理性も含め肉体も含めすべて土から生まれる第一の人間、生まれながらの人。これを「肉」と呼んでいます。それに対して、あのニコデモとの話で、

「人は上からうまれなければ、人新たに生まれずば」

という、この

「上から生まれる」

これが霊の新しい人の誕生なんです。この人は「霊なる人」と言うことができます。

キリストの言葉は、霊なる人に対して語られている霊の食物なんです。だから、キリストの言葉は、肉なる人がいくら噛みしめても、本当は咀嚼そしゃくできない。その人自身が霊の人に創り変えられたら、どんどん入ってくる。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出るひとつひとつの言で生き



る」

と、キリストは言われた。だから、キリストにとつては、神の口から出る言は本当に食物だった。ところが、我々生まれながらの肉なる人間は全然食べられないんです。落差が大きい。

その落差をうずめるためにキリストがしてくださったのは、まず我々の罪を背負ってしまふ。我々を地獄行きの身から天国行きの身に切り替えてくださるという、救いの御業です。それだけではない。霊の生命をくださる。新しい生命をくださる。霊なる人として我々を新しく産み出してください。その方はもっぱら神の御意を求めて生きる。今までは自己中心で生きてきた。ところが、新しく生まれた人は、神の栄光のため、

「神・キリストの栄光が現れますように」

というふうには、願いが変わってきたんですよ。自然とそう変わってしまうんです。キリストという方はそういう方ですよ。自分のために何も求めておられない。すべて、

「御意が天におけるごとく地にも、この身を通して、成りますように」

と言って、神にゆだねきって行かれると、癒しの業、人を生かしめる業、さまざまのあの恵みの業が展開した。しかし、人々は御利益的にしか受けとらなかつた。けれども、イエスが願っておられるのは、

「肉なる人から霊なる人へ切り替われよ。そのために必要なことは、私がみんなした。十字架で旧いあなたを葬った。そして、甦って聖霊という姿であなたの方の中に帰ってくる。私はあなたといつも一緒に居りたい」

と、キリストは願っていてくださっているんです。ありがたいことです。

「何も修行なんかいらん。『主さま！』という一言の祈りでいいんだよ」

と。キリストが、

「お前たちと一緒に居りたい」

と、向こうが言ってくださっているんです。それを断ったら、片思いになってしまうな、キリストのね。そんな片思いの苦しさをイエスに味わわせたら申し訳ないです。

●人間の死後の状態（コリント第二の手紙4～5章）

次にいきます。

《Ⅳ 新約聖書の中のパウロ書簡から

我々人間が死後、どのような状態で居るのかについて、使徒パウロはコリント

人への第二の手紙第4章16節から第5章10節において語っている》

ここから書いてますことは、私たちはいつたい死んだあとはどうするんだろうかと。誰も思うでしょ。世間ではみな気楽に、

「向こうから見ているんですよ」



とか言う。

「本当なの？」

と聞いたら、誰も確信をもって言えないはずです。けれども、何か恩師だとか何だとか、  
「向こうから皆さんのことを見ていらっしやいますよ」と、  
と、そういつてやりますけれども、

「本当にそうなの？」

と、私は聞きたいけれども、そんな意地悪な質問はしません。黙ってます。

でも、パウロはどう言っているか。案外、死後の自分たちの姿は聖書に出てこないんです。けれども、ここに引用しましたこのコリント書に出てきている。まず、コリント第二の手紙の4章16節から、

「<sup>16</sup>だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。<sup>17</sup>なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。<sup>18</sup>わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」（第2コリント4・16～18）

私たちのからだも「見えるもの」です。これは一時的です。その「外なる人」はこわれます。けれども、「内なる人」「見えない人」、霊的人格は生き続けるよと。導入部がここにありません。そして、5章に行きますと、それを詳しく書いてある。

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋

これは私は肉体だと思っています。

がこわれると、神からいただく建物、すなわち天にある、人の手によらない

永遠の家

これは霊体だと思えます。

が備えてあることを、わたしたちは知っている。<sup>2</sup>そして、天から賜わるそのすみかを、上に着ようと切に望みながら、この幕屋  
これは地上の命、地上のからだ。

の中で苦しみもだえている。<sup>3</sup>それを着たなら、裸のままではないことになろう。<sup>4</sup>この幕屋の中にいるわたしたちは、重荷を負って苦しみもだえている。それを脱ぎ落とす。

「脱ぎ落とす」というのは自殺することです。

願うからではなく、その上に着ようと願うからであり、それによって、死ぬべきものが、肉体が、いのちにのまれてしまうためである。<sup>5</sup>わたしたちを、この事になう者にして下さったのは、神である。そして、神はその保証と



して御霊をわたしたちに賜ったのである。

いかに御霊をいただくことが大事かと。御霊が私たちに見えないものを見せてくださる。見えないものを味わわせてくださる。

6だから、わたしたちはいつも心強い。そして、肉体を宿としている間は主から離れていることを、よく知っている。7わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。

見えないものを見つめながら歩いていく姿が「信仰」と、パウロは言っているわけです。信仰によって歩いて行く。

8それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。9そういうわけだから、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである。

もう生きる目標が変わったんです。自分のためではない。主が喜んでくださる生き方をしよう。こういうふうに変ったんですね。

10なぜなら、

理由はちよつと恐ろしいことが書いてますけれども、

わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。」

（第2コリント5・1〜16）

だから、地上だけではありませんよ。地上を去ったのち、神・キリストの審判の座の前に現れて、一人びとりが申し開きをしなければならぬ。我々は子ども頃、

「死んだら、閻魔さまえんまの所へ行く。うそをついたら舌を引っこ抜かれるよ」

と聞きましたね。ここに、この世だけのものではないとある。誰でも、

「キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったこと、語ったこと、それぞれに応じて、報いを受けねばならないのである」

ということが書かれています。

### ● 死人の復活（コリント第一の手紙16章）

それから、もう一か所、死人の復活のことがコリント第一の手紙の16章に書かれています。ただ、どうもパウロの書いているところを見ると、これは「終わりの日の復活」のよくな感じがする。キリストの再臨というのが信じられていました。キリストが再び来られる時に死人は甦る。そういう書き方をしている。私は、

「そこまで待つていられますよ」

と言っているんです、パウロさんに。簡単に言いますと、



《また、「コリント人への第一の手紙」16章では「死人の復活」について述べている。「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに甦り、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに甦り、弱いもので蒔かれ、強いものに甦り、肉の体で蒔かれ、霊の体に甦るのである」と。》

これが結論です。つまり、我々の肉体とか、始めにあるのは不完全だ。ところが、復活の時にはもつと素晴らしい完全なものに変貌する。それが既に眠った人の遺族にとつても慰めですよ、ということパウロがさかんに書いている箇所なんです。

「兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。<sup>2</sup>もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守つておれば、この福音によって救われるのである。<sup>3</sup>わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、<sup>4</sup>そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえつたこと、<sup>5</sup>ケパに現れ、

これはペテロのこと、

次に、十二人に現れたことである。<sup>6</sup>そのうち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。<sup>7</sup>そのうち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、<sup>8</sup>そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。

なぜ「月足らず」と言うかという点、パウロはキリストの弟子たちを迫害していましたが、それがここに書いてある。

<sup>9</sup>実際わたしは、神の教会を迫害したのであるから、使徒たちの中でいちばん小さい者であつて、使徒と呼ばれる値うちのない者である。<sup>10</sup>しかし、神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜つた神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた。しかしそれは、わたし自身ではなく、わたしと共にあつた神の恵みである。<sup>11</sup>とにかく、わたしにせよ彼らにせよ、そのように、わたしたちは宣べ伝えており、そのように、あなたがたは信じたのである。

<sup>12</sup>さて、キリストは死人の中からよみがえつたのだと宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか。<sup>13</sup>もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかつたであろう。<sup>14</sup>もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、わたした



ちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。<sup>15</sup>すると、わたしたちは神にそむく偽証人にさえなるわけだ。なぜなら、万一死人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかったはずのキリストを、よみがえらせたと言つて、神に反するあかしを立てたことになるからである。<sup>16</sup>もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。<sup>17</sup>もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる。<sup>18</sup>そうだとすると、キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまったのである。<sup>19</sup>もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあつて単なる望みをいだいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。

パウロは、復活ということがなかったら、自分は偽証人であり、また自分の生活は全く空しい愚かなものになってしまう。むしろ、明日をもしれない命なんだから、さあ飲み食いしようじゃないかと、それが関の山だというようなことを言う。

ただ、ここでパウロさんに文句を言いたいことがあるんです。

「もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう」

というが、これは逆です。死人がよみがえるかどうかわからない。確かに審判を受けるためによみがえるかもしれませんが、そんなことはわからない。けれども、キリストは甦つてくださった。しかもそれは息を吹き返した甦りではない。栄光の姿で現れた。別次元の生命が現れた。これが大事なんです。

普通の甦りというのは、息を吹き返す、それだけのことでしょ。ところが、キリストの事態、復活とよんでいるのは、別次元の高次元栄光ある姿で現れた。それはイエスの中に宿つた本質が忽然と現れただけのことです。必要があつて、それまで隠されていた。そして、人の罪を背負つて十字架に死なれた。しかし、死んで地獄まで落ちて、その地獄で苦しんでいる者を救いあげて、そして、あの栄光の姿で現れてきた。これが復活と呼んでいる事態です。

今度は、そのキリストのあの栄光の姿と同じ姿に私たちをも化そうと、変貌させようとしていらつしやる。これが我々の希望なんです。キリストは決して自分だけが天国へ行つて、「あばよ」なんて、そんな方ではない。キリストが味わわれた苦しみ、

「それはもうお前たちは味わわなくてもいいよ。でも、私がいただいた生命、これはお前たちに十二分に与えたい。そのためにこそ私は罪を背負い、地獄にまで行つたのではないか」

と。こういう底抜けの愛なんです。この底抜けの愛をうたっているのが、パウロのローマ書8章の終わりの方です。



「キリスト・イエスにおける神の愛から誰が引き離すことができるか。運命も環境も、その他様々なこと何があつたつて、キリスト・イエスにおいて現された神の愛から我々を引き離すことは絶対不可能である」

と言っているのが、ローマ書8章26節から御霊の祈りがあつて、39節にいたるまで、そういった我々の栄光の姿を宣言してくれている。そういうところです。

ですから、私はパウロさんに言いたいの、死人が甦ることは、そんなことはわからんけれども、キリストはご自分の復活という——息を吹き返すだけではない、栄光の姿に変貌する——しかも、これによつて死人を甦らせる。その事態を引き起こしてくださつた。そして、その死人の甦りは、審判のために甦る人もあるでしょう。けれども、イエスを信ずる者にとつては、それは永遠の生命への変貌である。

しかも、私に言わせていただくならば、生命は既に今の現世でいただいている。だからこそ、肉のからだは滅びても、そこで隠された霊の生命が忽然として現れて、キリストの栄光体と同じ姿になつて天に引き上げられていく。これが私の描いているビジョンです。皆さんはどのようにビジョンを描かれるか知りませんが、皆さんも。

そして、パウロは更に次のように言います。

20しかし事実、キリストは眠っている者の初穂<sup>はつほ</sup>として、死人の中からよみがえつたのである。21それは、死がひとりの人によつてきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によつてこなければならぬ。

アダムによつて死がやつてきた。アダムの背きによつて死が人類を支配した。そしたら、復活も一人の人によつて起こる。つまりイエスです。

22アダムにあつてすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあつてすべての人が生かされるのである。23ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち、

このあたりからは、なにかキリストが再臨される時に今まで眠っていた者が復活するよう、そういうイメージになつてしまふんですけれども。

24それから終末となつて、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力を打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。25なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時まで、支配を続けることになつているからである。26最後の敵として滅ぼされるのが、死である。

死が最後の敵であると書いてある。

27「神は万物を彼の足もとに従わせた」からである。ところが、万物を従わせたと言われる時、万物を従わせたかたがそれに含まれていないことは、明らかである。28そして、万物が神に従う時には、御子自身もまた、万物を従



わたせたそのかたに従うであろう。それは、神がすべての者にあつて、すべてとなられるためである。

そういう信仰をもし自分が持つてないなら、自分があらゆる危険を犯して、身の危険を犯してまで伝道しているのはいったいどういうことなんだ、ということをして以下、縷々述べているわけです。

<sup>29</sup> そうでないとするれば、死者のためにバプテスマを受ける人々は、なぜそれをするのだろうか。もし死者が全くよみがえらなるとすれば、なぜ人々が死者のためにバプテスマを受けるのか。<sup>30</sup> また、なんのために、わたしたちはいつも危険を冒しているのか。<sup>31</sup> 兄弟たちよ。わたしたちの主キリスト・イエスにあつて、わたしがあなたがたにつき持つていている誇にかけて言うが、わたしは日々死んでいるのである。<sup>32</sup> もし、わたしが人間の考えによつてエペソで獣と戦つたとすれば、それはなんの役に立つのか。もし死人がよみがえらないのなら、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのちなのだ」。<sup>33</sup> まちがつてはいけない。「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」。

<sup>34</sup> 目ざめて身を正し、罪を犯さないようにしなさい。あなたがたのうちには、神について無知な人々がいる。あなたがたをはずかしめるために、わたしはこう言うのだ。

<sup>35</sup> しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。<sup>36</sup> おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。<sup>37</sup> また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であつても、ほかの種であつても、ただの種粒にすぎない。<sup>38</sup>ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。<sup>39</sup> すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。<sup>40</sup> 天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違つている。<sup>41</sup> 日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。

<sup>42</sup> 死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、<sup>43</sup> 卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、<sup>44</sup> 肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから、霊のからだもあるわけである。<sup>45</sup> 聖書に「最初の人アダムは生きたものとなつた」と書いてあるとおりである。



しかし最後のアダムは  
これはキリストのこと、

命を与える霊となった。<sup>46</sup>最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであつて、その後に霊のものが来るのである。<sup>47</sup>第一の人は地から出て土に属し、これは我々、生まれながらの人、

第二の人は天から来る。<sup>48</sup>この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、  
天国人である我々はまた等しくなる。

天に属している人々は等しいのである。<sup>49</sup>すなわち、わたしたちは、  
肉体は、

土に属している形をとっているのと同様に、  
霊体は、

また天に属している形をとるであろう。  
その次はなにかキリストの再臨を思わせる記述です。

<sup>50</sup>兄弟たちよ。わたしはこの事を言っておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない。<sup>51</sup>ここで、あなたがたに奥義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。

この「眠り続ける」なんてことを言っているのは、パウロは、人間は死んで葬られたら、終わりのラッパが鳴るまで眠り続けるようなことをイメージしていると思う。私は絶対反対です。私は眠るのはいやです。私はもう直ちにキリストのところへ行きますから。皆さんもそうですよ。彼は、終わりのラッパが鳴った時に甦るといふ。

終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。<sup>52</sup>というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである。<sup>53</sup>なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。<sup>54</sup>この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。<sup>55</sup>「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」。

この言が成就する。

<sup>56</sup>死のとげは罪である。罪の力は律法である。<sup>57</sup>しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。<sup>58</sup>だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあつては、あなたがたの労苦がむ



だになることはない、あなたがたは知っているからである。」(第一コリント 15・1～58)

まあそんなことでね。私は向こうへ行つて、パウロさんに叱られるか、

「よう言つてくれた」

と言われるか、これは誰もわかりません。でも、私は断乎、今申しましたことを信じております。皆さんはいかがですか。そんな眠り続けるなんていやじゃないですか。だから、

「誰でもキリストにあれば新しく創られたものである。旧きは過ぎ去った、見よ、一切は新しくなった」

とコリント人への手紙の中にも出て来ます。そういう新しい我を頂いたんだということ。

## ●我々の生き方

そこで、最後になりました。「我々の生き方」というところへ行きます。

### 《Ⅴ 我々の生き方》

1 十字架・復活・聖霊の主キリストに在つて生きる。

生まれながらの「我」は、神よりも自分(我)を大切にする「肉」なる相において生きていた。存在そのものが聖なる神の御心とは相いれない「自己中心」的な生き方しかできなかった。それでいて、絶えず、病氣、事故、災害などの「災い」に対して不安があり、こころ安らかではなかった。私(奥田)は、将来に対しての心配・不安、そして、自己の内面の醜さなどに苦しんでいた。

そんな私の全て(過去・現在・未来)を、「我に委ねよ」と引き受けて下さっている方、主イエスに出会うことが出来た。旧き我は「十字架上で死に」、新しい我を賜わった。ガラテヤ書2章20節・21節のパウロの告白、コリント前書1章18節のパウロの告白は、我が告白となった。《

「われ主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるあらず。復活のキリスト、聖霊のキリスト、わがうちにありて生き給うなり」

これが現実となります。それからまた、

《思い煩いの塊であった私を解放してくれたのは、マタイ伝6章25節～34節の

「何事をも思い煩う事は不要。まず、神の国と神の義とを求めよ。さらば凡てのものは加えらるべし。この故に、明日のことを思い煩うな。一日の苦勞は

一日にて足れり」

との恵み深い主イエスの言葉であった。《

この言葉は恵み深かったですね。私は思い煩いのかたまりでしたから。しかも、

「私は責任感があるからそうなんだ、「ケセラセラ」(スペイン語で「なるようになるさ」の意味)なんて言っているやつは許せん」



と言つてがんばっていたんです。無責任だといって。それが逆転しまして、何事も思い煩うなど。責任を持つてくださる方がちゃんといらっしゃる。そしたら、そのお方にゆだねる。そういうお方を知らなければ、自己責任で、自分が家族のことも全部責任をとる他ないじやありませんか。それで潰れなかつたらおかしいですよ、真面目にやっているかぎり。それをケセラセラなんて言うのは腹が立つ。「腹が立つ」というのは若き日の私の姿。それで自分はいつもうなだれて、しょぼんとしていた。それがキリストに出会つて変貌させられて、今の私がいるんです。だから、あの頃の自分と今の自分とまるで違います。

それから次のところ、我々の生きる生き方のお手本。

《2「信・愛・望」に生きる。コリント人への第一の手紙13章。》

これは結婚式で必ず読まれます。

「4愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、5不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。6不義を喜ばないで真理を喜ぶ。7そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。」

8愛はいつまでも絶えることがない。」（第一コリント13：4～8）

あの有名なところ、あれを我々が生きるひとつのプリンシプルといたします。信・愛・望、これに生きる。

あえて言いますと、「信」は過去のキリストです。キリストがもたらしてくださった十字架の恵みをしっかりと受けとるのが信です。「望」というのは、将来我々は素晴らしい姿に変貌して主のみ許に行くわけですよ。これが望です。「愛」、これは現在なんです。上から神の恵み、神の力、聖霊が限りなく注がれて、我々を生命づけてやまない。鷲のように翼を張つて昇ることができるという、その現実をたまわる。これが我々の信愛望に生きるという生き方です。それから、

《3ローマ人への手紙第8章を生きる。とくに、26節から39節。》

如何なる運命・環境・艱難、

「その他どんな被造物もわたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。」

というパウロの凱歌。これをどうぞ皆さん、あとで味わってくださいね。それから、

《4ヨハネ伝14章～16章・弟子たちとの別れに当たつての主イエスの言葉（訣別遺訓と呼ばれているもの）。》

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また、我を信ぜよ」

に始まるこの箇所は、幾たび読んでも、力強い励ましを受ける。》

「心を騒がす」のが私たちなんです。クリスチャンであろうと、何であろうと、とにかく心が騒ぐんですわ。はい、修行が足りませんと。でも、キリストは、



「心を騒がせないでいいよ。私が居るではないか。神を信じ、私を信じよ」  
「はい、そうでした。ありがとうございます」

と。いつも立ち帰らしていただける。これがヨハネの14章から16章です。だから、これとずつと繰り返して読む。そして励ましを受ける。それから、

《その終りは

「なんじら世に在りては患難あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

で結ばれている。》

その前にも、

「平安を与える。私が与える平安は、この世が与えるようなものではない。誰も奪うことのできない平安をあなた方に与える」

これも16章で言っておられます。ですから、14章から16章は本当に大事な珠玉の言葉として、マタイ伝の山上の垂訓のところと同じように、大切にしていたいただきたい言葉です。

それから、次に引き寄せたのは、これも慰め深いですね。

《5 マタイ伝11章28〜30節

「凡て勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負いて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は軽ければなり」。》

皆さん、疲れ果てたとき、人生に「もう、しんどい、しんどい、助けて」というときに、この言葉に出会ったら、ああ有り難いことだと。

「すべて勞する者・重荷を負う者、われに來れ、われ汝らを休ません。一緒に荷物を背負うからね」

と、そう言ってくださっている慰め深い言葉です。

それから、最後の結論をここに書きました。

《まこと、

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」

との答えをもって、サタンの誘惑を退け、その言葉を実践された主イエスの言動は、わたしたちを励まし続け、力を与えてくださる。

「我は道なり、真理なり、生命なり」（ヨハネ14・6）

と宣言しておられる主イエス・キリストに従って生きる生き方こそが、永遠の生命を賜わった者として、ふさわしい生き方である。》

では、これでちょうど時間となりました。これで終わることにいたします。短くお祈りいたします。



## ● 祈り

主イエス・キリストさま、この復活祭のよき日の午後、この公開講演会においてになつた方々はまことに幸いなる方々でございます。聴けない御言、みことば天の御言、あなたの生命の言をしつかりとお聴きいただくことができました。あなたの御言は無限無量、聖書も伝えきれなくて呻いています。どうぞ、そのような、

「わが言はことば霊なり、いのち生命なり」

と仰った。また、

「人が生くるはパンのみによるにあらず、神の口から出る一つ一つの言ことばによる」

と仰つて、その通り実践なさつたイエス・キリストさま。あなたはしかも、私たち一人ひとりの罪を全部背負いきつて、

「もうあなたは無罪だ、問題なし。新しいあなたに生命を与える」

と仰つて、本来ご自分がいただかれるべき永遠の生命を私たちに下さいました。そして、ご復活なさり、あのご栄光の姿で現れて父のみもとに帰られました。そのお方が日々、私たちに聖霊の姿で宿つてくださつて、

「あなたたちと一緒にいきたいよ。地の極はてまで世の終わりまで一緒に歩もう」

と、あなたはエマオの途上で一緒に旅した旅人のような姿で私たちに寄りそつてくださいます。

主さま、いかなることも全部、あなたのところに持つていく。あなたはすべてをご存知であります。そのような、あなたが居てくださる人生、これが本当に勝利の人生であり、喜びの人生であり、神讚美の人生であります。

どうぞ、ここに集われた方々お一人おひとりとそのような新しい人として産み出してくださり、あなたが永遠に一緒に旅をしてくださるようお願いいたします。

この感謝と讚美と祈りを、皆さまの祈りと共に、主イエス・キリストの貴い御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

